



N=NICE VIEW(+7の雑誌) T.A=ART(芸術)&AMUSE(娯楽) V=VENTURE(冒険) I=ISSUE(特集) E=VOICE(声) 12年5月号 vol.63

発行日 2012年5月1日
 創刊日 2007年1月1日
 発行 株式会社ナイス
 発行人 代表取締役 冨田一幸
 印刷 前山企画
 住所 大阪市西成区長橋3-6-33
 電話 06-6563-1156
 E-mail info@nicene.jp
 H P http://www.nicene.jp/

アジュールヨート完成!

もう10年程前か、釜ヶ崎の、町会がなくなっていたホームレスも多い地域で、ボクの知人は、「住民とは、そこに住む人々、そこで働く人々、そこを行き交う人々」と言って町会を再建した。「どう、インクルージョン町会や」と知人は胸を張った。最近、福原宏幸さん（大阪市立大学）が、被差別部落に「高齢化」、「貧困化」、「流動化」が顕著で、若者がいなくなり、部落解放運動がどんどん小さくなっていると、警鐘を鳴らしているのを聞いて、ふとその話を思い出した。

同じ福原さんから、それも10年近い前だろうか、欧州では「フル就業」をめざすと言って、「失業率」を数える時代から、「就業者」を数えていく時代が変わったと示唆された。その話から、介護保険が導入されて10年以上が経ち、「介護の社会化」はいろいろ見方はあるだろうが、定着したかに見えるいま、要介護者を探す時代から、高齢期に伴走する時代になり始める時なのかもしれないと思った。あの時代から影をひそめた「家族介護」が、時を経て装いも新たに「地域介護」として蘇るようなものだ。

この二つの話を交差させて、部落解放運動の再生を考察できないだろうか考えた。部落に、困難を生きた高齢者が「滞留」し、困難を抱えた人々が「流入」し、互いに多重な課題を抱えて老いていくのだけれど、はたして介護の社会化だけでそのニーズに応えられる



「地域介護」を育てられないか

のだろうか。一方に慣れ親しんだ解放運動があり、一方にはそれはないという分裂状態では、互いが小さすぎて埋没してしまわないだろうか。そこに、かの知人のような「どう、インクルージョンや」という試みが生まれるとしたらどうなる。解放運動は「エコー共済」というユニークな資源を持ってるし、社会福祉法人もあることに着目して、町会のような「垣根の低い」社会的起業で地域介護事業を始めようとするのではないかと想像した。そこに、部落出身の人や解放運動にシンパシーを感じる人が、資金と労働を持ちよるなんて夢かなと思った。もちろん、もはや介護市場は飽和状態とも聞くのだが、一人一人の高齢期の生活を編んでいけば、そこに社会的起業の可能性は見えないだろうか。

釜ヶ崎では「釜釜介護」、東京の山谷では「山山介護」という介護の「地産地消」の試みもある。これ、「どう、地域介護や」というわけだ。

ボクは、ボクにも責任の一端があるだろう社会的起業による解放運動の再生戦略というもの、苦闘する解放運動の先端の活動者に「現代の水平社解消論」との危惧を与えていることを知って、刻々と変わる部落の現実を挟んで、もっと歩みよらねばと思った。今度、部落での出会い、「縁」を「エンパワー」に変える「地域介護」という試みを、危惧を持つ先端の活動者に相談してみようと思った。

(株)ナイス代表取締役 冨田一幸

この逸話 顔



監督：阪本順治
キャスト：藤山直美
豊川悦治
大楠道代
牧瀬里穂
佐藤浩市
製作：1999年松竹
カラー作品123min
脚・監：松竹株式会社

阪本監督作品「顔」は、主人公である引き籠りの姉が妹を殺し、遁走につぐ遁走の旅を続ける映画である。逃げ続ける女の身边には、彼女に似た愛されぬ人々や、社会から墜落し、失望をかかえた人物たちが入り乱れ登場するが、つまりは社会の異分子なのだ。彼らは行き場の無い彼女に時には同情し、共鳴する互助の姿を見せて居場所を提供する。彼女にとっての居場所はいつも不安定だが、彼女をとりまく人物たちの生活も、安心を担保できるものなど何も持たない。皆がどこかで生まれ変わることを考え、死なずに恥をさらしながらも、やむにやまれず生きていく顔を持っている。

いわくある彼女の面倒を見るいわくありげな人物たちは、しかし、彼女のいわく因縁などを誰も気にしないし興味も持たない。しかし、彼らはそんな彼女の避難所役となったり、希望の存在となったりもする。彼女もしばしの安息の後には、再び指名手配という絶体絶命の追手を逃れて遁走を続ける。

自らの顔を露出させず、秘匿の暮らしを続けるそれゆえの命名が「顔」であったの

だろうか。私が封切り当初見た印象はそうであった。逃げる女を追う指名手配書。自分の顔が他者によって複製される恐怖。しかし、この映画を再び見た印象はちょっと違った。

この作品のテーマである「顔」は、主人公が指名手配され逃げ回る顔を指すだけではなく、彼女の周辺を彩るさまざまな人物たち、地べたで這いまわらざるを得ない男や女たちのいくつもの顔であったことがわかる。無秩序な群衆が寄り集まった無秩序な連帯といえようか。彼らは決してベタベタしたかわりを持つわけではない。互いの共通した劣等意識や欠落感を発見し反応しあって、同じ種族としての感情を確認しあう顔と顔の連帯であった。

それは慈善とか支援というような、或いは“絆”とか“日本がんばれ！”などという陳腐な単語やフレーズに見られる集団志向や、表層の人道主義からは遥か遠くの距離にある。この映画では、地べたの湿度や温度、臭気や人の肌ざわりを実感できる者だけが味わえる、意識のない連帯感を描いており、私たちはそんな“贅沢さ”を味わいながらそこに共感する。現実には果たせないがゆえに、だからこそ映画という寓話（ファンタジー）に夢を託す。

阪本監督は、人生の深い絶望と悲しさ、人の内奥にひそむ不気味で深い闇—それはオカルト的でもある—を言葉や映像ではなく、空気で表現するのが大変上手な演出家である。寝盗られ男の復讐を描いた名作「トカレフ」（93年）や、昨年公開された、寝取られ男の回生をコミカルに演出した「大鹿村騒動記」、そして女性を主人公にしたこの映画の後半にも現れる山村漁村の祭礼行事の共通したシーンは、聖俗貴賤をドラマの背景にたくみに織り込みながら、漂泊し逸脱する主人公たちへの手向け、あるいは鎮魂を見事な展開で見せてくれた。

hidarimakii

